

青春スクロール

母校群像記

saitama@asahi.com

秩父鉄道で通学 号泣・笑顔・皆勤賞…

熊谷女子高校（以下、熊女）には、秩父鉄道・秩父本線を20駅前後かけて通う生徒も少なくない。

大学の医局などを経て横瀬町で皮膚科医院を開いた亀田叔子（74、1966年卒）は秩父市の御花畑駅が最寄り駅。行きも帰りも小説を読みふけた。1年時、はまったのが「風と共に去りぬ」。帰りの電車で大号泣したことがある。「よしこ、やめて」と恥ずかしながら友達に「メラニー・ハミルトンが死んじゃうのよ。泣かないわけにはいかないのよ」と返した。

学年ごとに乗車車両が決まっていたそうだ。「1年は先頭。ほかの学校も同じで、自然に仲良くなった」。特に熊谷高校の生徒とは



岩手県陸前高田市での診療が亀田のライフワーク。コロナ下、画面の看護師・倉岡美保を相棒にリモートが中心だ

県立熊谷女子高校



大学時代に「双熊会」という会を結成。いまでも俳句づくりを通してつながっている。

磯田幸実（37、2003年卒）も御花畑駅利用者。毎朝、秩父夜祭で有名な団子坂を転がるように駅に急いだ。「とにかく自由だった3年間」。部活掛け持ちOKの熊女で属した部活は五つ。料理をし、泊まり込みで流れ星を眺め、放送室で好きなCDを流した。

JR東日本に入社し、「高輪ゲートウェイ」駅周辺の開発に携わっていたころ、様々な分野の友人を秩父の知り合いに引き合わせ、楽しいことを考える「ソトものツアーズ」を始めた。都会と田舎。互いを認め合う。熊女の校風にも通じる関係は地域を盛り上げる活

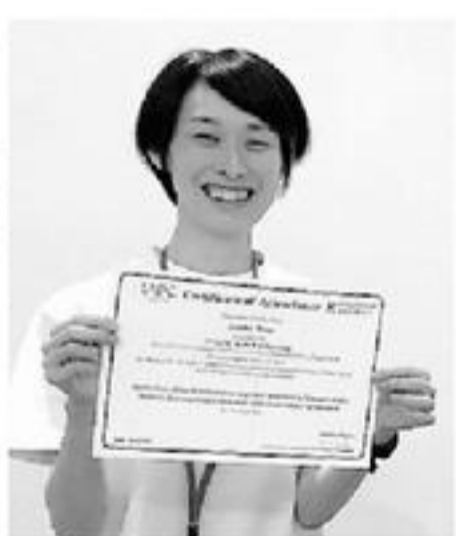


秩父駅前で横瀬の「どぶろく」を楽しむ磯田。「このロゴも知人のデザインなんですよ」

動に発展した。コロナ禍や、ユニクロを展開する「ファーストリテイリング」への転職でその輪から離れているが「いつでも受け入れてくれる仲間ですから」と笑顔を見せた。

大手製薬会社で私たちにとって一番身近な経口薬の開発に携わる大野麻美（37、04年卒）は、秩父駅から通った。座って勉強したかったのでラッシュを避けた「時差通学」。だからいつも熊谷駅から猛ダッシュ、始業ぎりぎり滑り込んだ。そして皆勤賞をとった。

人気テレビドラマ「科捜研の女」の主人公にაცოგაれ、千葉大薬学部の推薦入試を受けた。合否を左右する重要な小論文の添削



学会の出席証明書を持つ大野。吸収のいい薬の成分デザインなどに関する研究発表も重要な仕事だ

を、数学の先生に頼んだ。「同級生みんなは『なんで〜』ってダメだし。でも数学者っぽい独特の論理的思考が私好み」。納得の小論文を書けたそうだ。

皆野駅を利用したのは早大3年の強矢悠莉（20、20年卒）。車中、教科書や参考書を開いたが、いつの間にか夢の中。「でも（熊谷駅の二つ前の）石原あたりで起きるんです。不思議ですよ」。部活は写真部。2年のとき、卒業間近のチアリーディング部の先輩たちに制服姿でジャンプしてもらった。組み写真「魔女、旅立つ」は翌年の全国高校総合文化祭で優秀賞に輝いた。

大学でも写真部で腕を磨くが「作品的には低空飛行」。卒業までに満足の1枚を撮ることを自らに課し、愛機を携えて秩父の山々や名所を巡っている。



母校に飾られる「魔女、旅立つ」と強矢。いまも大学まで2時間強の長距離通学

＝敬称略